

# 森林保全に係わる市民参加の現状と課題

岩手大学農学部 山本信次

昨日の研究発表会の資料等を見せていただきましたが、森林管理に対してボランティア的に参加するとか、市民参加あるいは環境教育に関しての発表も幾つかあったように思います。各地でそういった活動が活発に行われているということに非常に感銘を受けています。

## 1 はじめに（森林ボランティアの現状）

十数年も前になるでしょうか。私が学会で初めて「森林ボランティア」というものを取り上げたときは、会場の反応がシラーとしており一部の変わり者の話を大々的に取り上げていったいなんの意味があるんだと怒られました。私自身も「あーひょっとしたらそうかもしれないな。」と素直に思っていたんです。かつてであれば森林を管理するという仕事は、基本的には森林が存在する所にお住まいの地域の方々、あるいは林業関係者の方々、そして行政に関わるような方達が「自分たちは、森林を守るプロフェッショナルである。」と誇りをもって仕事を進めてこられたのが通常の形だったわけです。

それから十数年を経て、時代の変遷もありますが森林を守る、あるいは森林を適正に管理するということが非常に難しい時代を迎えた時、初めて今までの枠組みだけではなくて、もう少し町場の人とか、そういった人たちと一緒に森林を守ろう、守っていく仲間として迎え入れていこうという動きが林業サイドからも始まって来ました。

また、都市住民の側からも自分たちも森を守ることに参加したいという意欲が非常に高まってきたことが重なり、平成9年時点では林野庁で把握した、いわゆる森林ボランティアを行っているグループの数は300位、それが平成12年には大体600位といきなり2倍になり、平成15年の調査では1,100を越えたようです。

この不景気で、いろいろな物がデフレにより数が減っていった時代に、ものすごい勢いで増えてるというのは、それだけ新しい森林管理の枠組み作りが進んでいる、そういう時代になって来ているのではないかと思います。

## 2 公共性・公共

(1) 今日、皆さんも一緒に考えて頂けないかと思って、キーワードを考えました。「公共性とは何か？」ということです。あるいは「公共」でも良いと思います。

例えば、わざわざ都市住民が交通費を払ってまで、もっとすごい人になると自分のお金でチェーンソーを買ってまで、山仕事をしに来てくれるということは、どっかおかしいんじゃないかという行動なんですね。（普通に考えてみれば、お金を払って自分が一銭にもならないことを一生懸命やるわけですから。）

その中には、やっぱり森林というものは公共の物、みんなの公の物であり、それを守る事に対して自分も参加しようという意欲があるということは、間違いないと思います。

ただ、最近この「公共」という言葉自体、いったい「何が公共」なのかということが問われているように思います。

英語では「公共」の事は「パブリック」という言葉で言いますが、日本語の「公」という字、あるいは中国語から来ているかもしれませんが、この「公」という字を考えると上の部分「ハ」のところは屋根を意味し、屋根のある家の中にいるということです。

「公」は「おおやけ」とも読みます。昔は「おおやけ」を「おおや」と言いました。「おおや」さんは普通、家を貸してくれる人、自分より上の立場にいる人ですから、日本における「公」というのは、常に「お上」のことで、日本語では、上の方の偉い人がやってくれる事というのが「公共」だったんです。

日本では普通に公立学校というと、大学では国立の学校、県立の学校があり、小中学校では市町村立学校で、いわゆる公立学校というのは官あるいは自治体である公共機関が立ち上げたものを指して公立学校といえます。

でも、イギリスのパブリックスクールというのは私立の学校で、私立であろうがなんであろうが、みんなのための物はパブリックなんです。ですから英語で考えられる「公共」、パブリックという物はあくまで横の関係で、みんなが使う物、みんなで作る物、みんなにとって必要な物が「公」です。

日本語では、むしろこういう考え方は「公」というよりは「共」であり、「共」のほうがパブリックというイメージが近いというふうに考えられます。日本の場合、公に属する事というのはつい最近まで、国がやるべき事、都道府県がやるべき事あるいは市町村がやるべき事で、ある意味みんなのために必要なことというのは全部「お上」に上げてしまうというような考え方が非常に根強かったように思います。

- (2) 象徴的な事としては新聞にも出ましたが、かつて千葉県のある市町村が「すぐやる課」という課をつくりました。すごい話でしたね。「家のドブが詰まっているからドブさらいに来てくれ」という住民の電話一本で、市町村の役所の方から行ってドブさらいをする。それが、その当時はものすごく画期的なこととして、先進的な事例として取り上げられました。すばらしい、行政サービスをそこまでやってこそ行政であると褒め讃えられたわけですが、自分たちの身の回りにある自分たちにとって必要なことを、全て人任せにしてしまうという社会が果たして本当にいい世の中なのか。素直に考えてみれば、それはやっぱりちょっと違うんだろうなというふうに思います。

現在、その千葉県の市町村でも「すぐやる課」は廃止され存在してないそうです。

日本人は、もともと公に属する事は全部人任せにしていたのかというと、実はそうでもなくて、江戸の幕藩体制というのはある意味、大変安上がりな政府だったようで、百万都市の江戸に今でいうおまわりさんに当たる「同心」は20人しかいなかったそうです。おまわりさんが20人しかいなくても、今の東京の1年間で起こる犯罪件数よりも、江戸時代の300年間を通じて起きた犯罪件数が少なかったということです。なので、ちょっと前までの日本人は、自分たちで自分たちの地域を守ったり、自分たちで物を整理したりということを、当たり前のこととしてやっていたことになります。

(3) そういうことが、明治維新以降のおおよそ130～140年の中でいつの間にか変わっていきました。これは、いわゆる一般の人たちの考え方だけの問題ではなく、当時の政府は富国強兵政策をとっていて、全員一丸になってという時にはむしろ「公」が目標を決め、全ての事は俺たちがやってやる、外国から多くの知識を仕入れてきた有能な政府の人間が一般の人たちを指導してあげるから後についてきなさいというふうに、ある意味では市民や普通の人たちを自分たち政府の下においてた。人々も、それに慣れていった、そういう時代だったんです。

1950年代位までというのは、戦前までは外国との植民地の獲得競争とかそれに向けてやっていたし、戦後は経済的な発展を目指してやはり中央主導型の時代でした。市民の側も何も考えないで良いし、任して文句を言わないでおけば政府がやってくれる、何かあったら陳情し、あるいは反対しておけばいいわけですから、それに慣らされていく中で、「公」というものがどんどん「お上」に変わっていきました。

こういったことが、ある意味では不幸なことなんです、今、日本の国はお金がなくなってきた、政府側は行政改革という流れの中で市民の側にいろんな事をやってもらう一方で、市民の側はその「お上」がやってくれる「公」というものに納得しなくなってきたという側面があるんだと思います。

これは、世の中の変わり目というか世の中自体が変わってきたことで、かつては食料にしろ何にしろ絶対的に物が足りないときは、画一的なサービスでも何でもいから足りない物を補ってくれればよかったし、「お上」のほうで全国的に一律の基準を作って生活水準を上げることや労働条件を上げることもやりやすい時代でした。

(4) 世の中がある程度満たされてくると、物の見方が変わってくるわけで何がみんなにとって最低ラインなのかの見方も変わってくるわけです。福祉の場合が非常に顕著で、例えば生活保護でありますとか障害をお持ちの方に対しての給付というのは、元々だいたい全国一律の基準となっていました。

もう死ぬか死なないかの時には、何でもいからやってくればありがたかったのですが、もう少しやってくると自分は便利なんだ、もうちょっとこうしてほしい、例えば車イスで出掛けたいんで自分たちが町まで運んであげるといのは、今まではタクシーじゃないとダメな訳ですから、無理だとなります。そうすると行政としては、福祉のバスか何かを買って、その人達を全部巡回で連れていかなきゃならないし、そんなことをいちいち全部やってたら、あまりにもお金がかかり過ぎます。

そこで多様化したサービスを供給する担い手は、必ずしも「お上」でなくてもいいんじゃないのか、公共のサービスを自分たちに合った形で作り直してもいいんじゃないかというふうな流れが出てきたと思うんです。

私は別に、行政や政府の批判をしているつもりは全然ないんですが、日本における公、公共という物が「お上」ではなくてパブリック（共）という物に、今じっくりと変わっていかうとしているんだと思います。

ですから逆に言うと、本日は、国有林の場所でお話させて頂いているわけですが、国有林あるいは林野行政といったものも、そういう意味で今までの「公」から、「共」、

「パブリック」への転換というものをまさに始めておられるわけですし、そういったことをこれからより深く考えていかなければならないのではないかと考えています。

- (5) 公共というのはみんなにとって必要な物、あるいは分割しては供給できないようなものが公共性を持ったものだとする定義と、もう一つは所有が公的なものとする考え方があります。森林の場合に二番目の方の考え方をしますと、じゃあ公共の森林というのは国有林と県有林と市町村有林しかなくなってしまって、私有林には公共性はないということになってしまいます。

ですが、誰もが知っているように森林には公益的機能というものがあって、森林の公共性というのは、所有のいかんに関わらず有るもので、それがなければ特にこういう狭い島に住んでる日本人は暮らしていけないわけですね。

だからこそ、今、市民の参加、あるいは税金の投入をしてでも、あるいは自分が損を覚悟してでも森を守ろう、など色々な人が出て来ているわけです。

### 3 戦後の森林

- (1) 若干、戦後の日本の林業のあり方を振り返りますと、間違いなく必要があったことではあるんですが、全国的には40%を占めるスギを中心としてヒノキ、カラマツといった人工造林地が広がっています。

森林ボランティアの活動をして下さる方々のように森林の管理は、「市民の参加でやっていくべきだ」と林業サイドにとってはうれしい応援団の方たちがいる一方、もう一方では「スギばかり植えたから花粉症になった」だの、あるいは「動物の保護を全く考えていない植え方はいかんだ」という市民の方もいらっしゃいます。

よく一般の市民の方々の前で、日本の人工林がここまで増えた理由についてお話することがあります。

一つ目は、唯一、国内で自給できる資源であった森林を戦争の時に大分伐ってしまい、それをもう一度森林に戻したり、戦後焼け野原になっている町を復興するための復興資材として持って来るためには、どこの世界に広葉樹を植えようと思う人間がいるんだろうか。だからスギを植えた。これは誰からも別に、後ろ指を指されるような話じゃないと思います。

二つ目は、1950年代頃から化学肥料がいっぱい入ってきたし、燃料が薪や木炭から石油に変わることによって、いわゆる雑木林と言われるような森林が身近に必要なでなくなった。そうした中で、経済的な価値が薄れてしまった森林を、スギなどに変えなければならなかった。このことは、都会の人達の生活様式が変わったことが要因の一つとなっており、スギを植えた事に対して文句を言う筋合いじゃあないのではないのでしょうか。

あと、若干これは問題な部分もありとして糾弾されても「ご免なさい」という感じなのは、奥地の原生林的な所もスギの造林地に変えてしまったことです。

- (2) スギの造林地を作ったこと自体は、当時の社会の要請に沿ったことでしたし、必ずしも間違っていた事とは全然思っていないんですが、ただ、そのことがズーッと続い

て、例えばスピードが出すぎてしまった車のように止まれなくなってしまうというこの構造が、先ほど申し上げた、「お上」と市民の関係となってしまったのじゃないかと思います。

その当時には、木材の自給率は下がり続けており日本の森林の中の人工林が占める割合もある程度のところまでできていましたが、一度立ててしまった計画が慣性のように続いて、止まれなくなっていたということは、「公」という物が「共」として、みんなの意見を吸い上げる視点を持っていなかったところに大きな原因があったのではないかと思います。

「木材が足りなかった。焼け野原になっていた。北上川が氾濫するような大変な水害が続いた。だから森を元の状態に戻さなくてはならない。木材がちゃんと生産されるような森を作らなきゃいけない。」というスタート時点での林業のプロフェッショナルの人達の考え方として、人工造林を進めるということは、絶対に間違っていないと思います。

ただ、そのことがズーッと続いて行った時に、そろそろ、一般の市民の人達の森林に対する期待が、「木材の生産だけではなくて、野生動物が住む所も必要なんではないか。自分たちが森に親しんで遊んだりするところも要るんじゃないか。もっともっと多様な森が欲しいんだ。」というように変化が生じていたにも関わらず、林業関係者の方では慣性がついていて最早止まれなくなっていました。

そのことが、1970年代から1980年代に残念ながら頻発してしまった、林業と自然保護の対立と言われるようなことなんではないかと思います。

(3) 私は、大学の演習林に所属しておりますし、私自身も森林を管理しております。

私自身あるいは私を含めたチームとして演習林を守っている現場の技術員の方々は、自分たちは森のプロフェッショナルであるという誇りを非常に強くもっています。そのことに対して、外から普段の苦勞も知らない人間がいきなりやって来て、「おまえら、なんだよ、そんな事やりやがって。」と言われたら頭にきます。

森林というものが、みんなのための物である以上、確かに自分の都合だけで森林作りをしてはいけないんだらうなということも同時に感じたりはします。特に、国立大学の森は国有の森ですから、自分のお金儲けのために、ある程度森を自由に出来る権利を持っている民間の森よりは、より多くみんなの意見を聞かなくてはいけないだらうなと、そういうふうを感じるようになって来ました。

ただ、残念ながら市民の言ってることは、ある種の無責任さを伴っていますし、公が「おおやけ、お上」だった時代には、文句を言いに来るだけだったわけで、文句を言いに来るだけの人の意見を聞き入れる程、度量の広い人というのは世の中にはそんなに多くはないのではないのでしょうか。

#### 4 ボランティア活動の動機

(1) 森林ボランティアの当初の動機としては、まず口をだす前に手を動かして一緒に森を守ることをやってみよう、というところから始まっている例が多いと思います。

私ども森林とか林業の関係者が、この時に勘違いしてはいけないのが、彼らをただ

単に安上がりな林業労働力とか、森の管理が大変だから手伝ってくれる人と捉えることです。

「今、林業が大変だから手伝ってあげよう。」として参加していたボランティアの人たちも、活動しているうちに、非常に森のこと林業のこと、あるいはそれを守ってきた農山村のことについて詳しくなってきた、ときには「森ってのは、こうあったほうがいいんじゃないかな。」とか「森を守っていくための仕組みは、こうあったほうがいいんじゃないかな。」ということを出す人達がどんどん出てきます。

その人達の言うことを、今までみたいに「中身も知らないくせに勝手なこと言ってるんじゃないよ。」とはもう言えないわけです。一緒に仕事をして、中身も知って、そういった関係というのは、最近よく言われる言葉では「共同」あるいは「パートナーシップ」という言い方をします。一緒にやっていく中で、対等な関係を作っていく、そのことが次の新しい仕組みを作っていくために必要になるんだというのが、共同とかパートナーシップとか言われる考え方なんです。

森林の管理が今までの枠組みでは、どうしてもうまくいかなくなってきたから市民の人たちに安上がりに手伝ってもらおうという認識は、逆に林業関係者がある種の「お上」の視点で、上から市民を見下ろしています。

「あいつら何も解っていないから、いろいろ勉強してもらおう」、「あいつらだつて（公共）公益的な機能の恩恵を受けてる訳だから、手伝ってくれよ」というのが、今までの林業関係者からの市民参加の見方で、どうしても見下ろしていると思います。

確かに最初の時点では、ほんとに何も解っていない人が来たりして、林業のことをいろいろと説明するのが非常に大変です。けれども、その人達になんとかいろんな事をちゃんと理解してもらって、対等なパートナーとしてこれから森林を守っていく枠組みをもう一回作り直す。そういう気概を、林業関係者は持たなければならないと思います。

(2) ひとつ例を出させていただきますと、東京に「森づくりフォーラム」という森林ボランティア団体のネットワークの組織があります。

今、国有林には、森林を提供し森林ボランティアの方達に、そこで色々活動していただく「ふれあいの森」という制度がありますが、この制度の原型になったようですけれども、「森づくりフォーラム」が東京営林局と国土緑化推進機構と協力して、「緑の募金法」制定の記念事業ということで、神奈川県内の国有林でボランティアの活動地「さがみの森」を作るという事業だったんです。

その時の「森づくりフォーラム」の中での議論というのは非常に厳しいものがありました。一番過激な反対論は「国有林というものは国が責任を持って管理するべき森で、そこをなんで市民が手伝わなきゃいかんのか。」「自分達は、手入れがしきれなくなった個人の小規模所有者とかそういう人達を、なんとか助けようと思ってやるのに何で国の森を、しかもタダでやってやらにゃいかんのか。」という発言がありました。

最終的には、全員一致で「やろう！」となったわけですが、一つ目の理由としては、これからの森を守ってのために、今、いろんな事を考え始めているところで、それに

は自分達だけで出来るわけではない。国とか県とか市町村とか多くの人達と一緒にやっ  
ていかなければならない。今、初めて国の方から、意図はどうあれ自分達と一緒に  
何かやらないかとの投げかけをしてくれた時に、ここで拒否してどうするか。

理由の二つ目は、70年代までの国有林と市民の関係は自然保護と開発反対という  
関係だけだった。でも自分達は外側から文句を言うだけの市民団体だけではありたく  
ない。色々問題もあるかもしれないが、中に入って一緒に何かをやって、それによっ  
て国有林と対等な関係を持ちながら、是々非々の態度で意見を言っていきたい。

良いことは良い、ダメなことはダメだということ言うには、やっぱり外にいたん  
ではダメだ。一緒に仕事をする事が大事じゃないのかとなったのです。その「森づく  
りフォーラム」の意思決定のための委員会は、月に1回開かれ毎回3時間くらい真剣  
な議論が4ヶ月間続きました。

「森づくりフォーラム」の人たちは、週末出て行ってただ目の前にある森を綺麗に  
するだけではなくて、森林を守っていくための枠組みを持っている。国有林のシステ  
ムをもっと自分達、市民の目から見て納得できる形にいくらかでも変えていきたい。  
そういう非常に遠大な思いを聞いたとき、ものすごく感動したのを覚えています。

その人達は、それまで普通、民間の山へ行って作業をやっています。村には村のル  
ールがあるわけです。そういう所へ入って行って、実際に一緒に汗をかいて、立場の  
違う人達と何かをやることで、新しい提案と一緒に作って行くんだということを、農  
山村の人たちと個人同士の関係の中でやってきました。この人達の頭の中では、相手  
が国でも民間でも同じなわけで、そこへ入って行って一緒にあり方を作っていきたい。  
今、そういう時代を迎えており、それが今、非常に大事な事なんだろうと思います。

### (3) 自然保護団体との協定

もう一つ象徴的だったのは、国有林の例で言わせてもらえば、市民サイドと協定を  
結んでその森林管理全体を共同で考えたり実行していこうという方式が出てきます  
が、この協定を全国で一番最初に結んだ相手が、この東北森林管理局青森分局と「葛  
根田のブナを守る会」という大変名高い自然保護運動の相手だったということ、初  
めて聞いた時はびっくりしました。ある意味ではもう不倶戴天の敵同士なわけで、「ブ  
ナを守ろう」いや「ブナは木材として使うんだ、伐るんだ」ってずっとやってきた同  
士が協定を結んだということに、正直なところ一番ビックリしました。

もう1つ衝撃的だったのは、「赤谷プロジェクト」というものですが、約1万h a  
の国有林を前橋営林局（関東森林管理局）が「日本自然保護協会」と地元の団体の3  
者間で協定を結び、どういう風に使っていくかを、今、真剣に話し合っている訳です。

このことは、日本の環境保全とか自然保護の関係については、みんなが大体共通の  
認識を持てるようになってきた。これからの先の時代の自然保護のあり方や認識は、  
自然保護協会の人達と同様に一緒に土俵に乗ってやっていかなければ駄目なんで、こ  
のことが市民参加の一番大事なことなんだと思っています。

今は、森林というものに対して市民の方達の関心が高まっていますから、みんな来  
てくれますが「下に見てしまう」態度でのぞんでいたらいつかは、そっぽをむかれま  
す。特に今のように森林を管理していくための経費が足りない場合、プロフェッショ

ナルな人間だけでは、どうにもならなくなっていて、森林を守っていくための新しい枠組みが必要と同時に、いつか、この人達が自分達と対等なパートナーになってくれる人達なんだという思いをちゃんと持っていなければいけないように思っています。

日本は、国有林に限らず林業行政に係わる人間、あるいは地元で林業に従事している方達を含めて、ここ何十年もずっと困ってきているわけです。それを今までは、内輪の人間の中だけで、「何とかしよう、何とかしよう」と一生懸命やっていたんですが、正直なところ何ともならなかった。何ともならなかったからこそ自分達とは違う人達にもどんどん入ってもらって、一緒に森のあり方を考え、森の管理の仕方を考え、力も貸して貰って新しい枠組みを作る。

プロフェッショナルとしての役割は、上から見下ろす事ではなくて、俺達が決めたから黙ってついて来いでもなくて、専門家として「私達は、森というのはこういうものだと思いますが……、」ということをきちんと提案していける、そういうことが求められているんじゃないかと思います。

## 5 森林ボランティア活動の実際と展開

- (1) 現在の森林ボランティア、市民参加をどういうふうに考えるのか。市民参加を行動で考えてみると、かつての自然保護運動のような、「やめとけ」と口を出す参加というのが1つ。次に対等な関係になって、これからのあり方を考えて行く、「知恵を出す参加」というのもあるかもしれません。それから、緑の募金ですとか、あるいは税金から森林関連の金を出してもらって「金を出す参加」というのもあるかもしれません。それで、「森林ボランティア」については、「足を運んで手を出す参加」と「口出す、知恵出す、金出す、手を出す参加」があります。

この市民参加の中でも「手を出す参加」である森林ボランティアというのが、非常にすばらしいと思っています。実際森林を守っていく労働力としては、正直なところ、たいして役には立たない。それは悪く言ってるのではなくて私自身も、その森林ボランティアの活動をずっと一緒にやってきました。

これは、東京にいたときの経験ですが、物好きの30人位の人間が毎月一回、鉈とか鎌とかを車に積んで、わざわざ家から車を2時間運転して山に集まってくるんですね。余談ですが、丁度オウム真理教の事件があった頃なもんですから、電車で来る人なんかは、あきらかに都会から竹籠しょって中に刃物を一杯入れてるものですから、警察に職務質問されたりした人もいました。

そういう物好きが30人程集まってきて、朝の10時から大体夕方の4時位まで一生懸命山仕事しました。30年生くらいのスギの造林地で、ずっと放置された所ですから、除伐から始まって、つる切り、枝打ちとまで立派なものではないですが、それが大体8ヶ月かけて約1haの手入れ不足だった森をとりあえず間伐するところまでやりました。

そうやって考えたら、1年間にその手入れ不足の人工林を1つのグループが、1.5ha手入れできたとしても、森林ボランティアの活動だけで森林が守れるなんていうのは、妄想だっという風に、やってる人間が解ってきました。そりゃそうですよ、夕方の5時頃まで死ぬほど汗かいてクタクタになりながら、また、車を2時間運転し



て帰る。

これで、日本全国の森が守れるなんて考えるやつがいたら、やっぱりそいつはおかしい。だから、市民の意見を取り入れていく時には、相手にも色々解って欲しいし、やれば森を守る作業がどんなに大変なことかって解ります。「口を出す参加」が良い悪いじゃなく、今までの「口を出す参加」っていうのは何もやった事がなく、実態を知らないで林業のことに口を出すから地元の人たちも頭にくるわけです。

けどやって大変さもわかった、あるいは地元に来て色んなことやってれば、特に岩手県なんかそうですが、人工造林が多いんじゃないかって文句言う人もいますが、山へ来て地元の人と話をして、昔の話なんかを聞いていけば、「この地域は、特産品であった炭焼がダメになった時、木を植えるっていう仕事があったから、この地域は今でも人が住んでいるんだよ」って話をそこで聞けば、それは自然保護の観点からすれば、広葉樹の方が良かったのかもしれないけれど、地域社会を守っていく為には仕方のない面もあったんだなってことが解ります。

どっちが良い悪いではなくて、その人がそういうことを解って考えてくれた上で、文句を言われたとしたら、多分僕らはそんなに頭にこないと思います。

一番辛いのは、無責任に物を言われることです。次にお金を出す話です。ある意味その何もわかんないけど金を出してくれる。これは世の中こんなにありがたい人はいません。私は親にも感謝しなければいけないと思うんです。学生時代ヘラヘラ遊んでいる時も、黙ってお金を出してくれましたが、そういうスポンサーっていうのは、なかなかいませんし、やっぱり、お金を出して森を守るということは、「公共性があるんだ」と、皆さんに納得してもらおうような活動が絶対必要だろうと考えています。

- (2) 今は森が大事だとみんな思ってくれてるから、それなりにそこにお金を出すって言う話が出て、あんまり反論ができません。一昔前に大騒ぎになった水源税の話が、各地の議会でポンポンと通っています。でもムードでお金を取ってるだけでは、コロっと話が変わった時には、やっぱり反対とすぐ言われるでしょう、お金を出してもらいからは、ちゃんと解ってもらわないといけません。

知恵を出してもらいということについても相手に解ってもらわないといけないうし、森林ボランティアとしての参加がある時には、まず「手を出す参加」をもっともっと広げていくことが、「知恵を出し」てもらったり、「金を出し」てもらったり、「口を出し」てもらったりする為のお互いにとって大事な前提条件になっているんだと思います。その上で、林業サイドから「見下ろす言い方」ではなくて、相手方にいろんなことを解ってもらい、時間をかけながらこれから一緒に森を守っていくシステムづくりが必要でしょう。

4年前の総理府の調査で「社会貢献性余暇」という言葉がありました。人間には働いている時間、寝ている時間と遊んでいる時間があり、余暇っていうのは遊んでいる時間だと思っていたましたが、最近は、「自分がその余暇の時間にやる事が人様の役に立ちたい。」と思う人が沢山出始めています。

こういう社会貢献性余暇を進めていこうというのが総理府の方針で、例えば地域の少年野球チームの指導者、地域の合唱団への参加、あるいはゴミ拾いとか、ズラーツ

と社会貢献性余暇について、何かをやったことについてのアンケートでした。

その中の1項目に、「国を守るために草刈り等をする」があったんです。今までやったことがある人が、約3%位で、今後も継続あるいは今後やってみたいと思う人は5%位いました。5%って少ないようですが国民の20人に1人が山仕事をやる時代が来るなんてのは、誰も考えなかったわけです。

そういう意味でも、まだまだ森林ボランティア活動は広がっていく余地があると思っていますし、全国的にも、どんどん広がりを見せていますが、森林ボランティアのグループが本当に森を守っていく新しい枠組みづくりに繋がっていくのかどうか。ひたすら山仕事をしているだけになるのかもしれない。

- (3) 山仕事さえやっていればそれでいいわけですから、それだけでも十分ありがたい話なのですが、私が参加していた「浜仲間の会」という会は、毎月山仕事に行くのですが、その会のモットーは、東京の一番奥に檜原村という村があり、この村で1986年に起きた雪害の森林を片づけることを目的として結成されました。

この会が非常におもしろかったのは、「檜原村でしか活動しない。」ということで、似たような山は隣町でもどこにでもあるが、檜原村の人達とじっくりと関係を持つため檜原村だけでしか活動しないということでした。単に山仕事をしたいってことだけじゃなくて、地域の人たちとちゃんと関わっていこうという姿勢があったこと、もう一つは手入れ不足の人工林の手入れしかないということでした。

市民の方の森への関心って色々あります。森の手入れをしたい人の中にも広葉樹の森を作りたい人もいるし、会への参加者がどんどん増えてくると色々考えの違う人も出てくるわけです。色んな要望が出て来た時「浜仲間の会」では、円満分家を進めました。昔の社会運動の場合は、考え方が違うとお互い除名だとか言ってケンカしているパターンが多いのですが、そうではなくて「考え方が違うのか。そうしたらおまえは、自分がやりたい考え方の自分の会を作りなさい。」と会を作るのを手伝うんです。

例えば「広葉樹の方をやってみたい人達の会」が出来るわけです。後から来た参加者の人が、「私は動物も住めるような広葉樹をもっと増やすような活動がしたいんです。」と言った場合には、隣の会があるからと紹介したりするのです。こうして、どんどん分家を作っていました。

そのことは凄く良いことだなと思います。市民運動もかつては、「自分たちが一番正しいんだ。だから自分たち以外の事を言う奴は全部アホなんだ。」と、そういう「におい」がする鼻持ちならない人たちの集まりだったような気がします。

そういうときに「浜仲間の会」をはじめ、今の社会運動ってのはそういう独善的なことではなくて色んな考え方があって良い。「森をきちんと手入れをして守っていかなくちゃいけないんだ。」との基本ラインをもって、間口を広げてくれている。これは非常におもしろいなと思いました。

- (4) それでも、次には森林ボランティアの人たちも、一生懸命一生懸命やってきて、みんな無理な事が解ってくるわけです。目の前にある任された森に関しては、ものすごくキチンと手入れして持ち主に返しました。でも、やっぱりその人達は「これはもう

無理だと。」1つの檜原村の森だけですら、自分達がいくら頑張ったって全部キレイにならないってことが解ってきます。解った時「浜仲間の会」は、「東京の林業家と語る会」という会を別途作りました。

山の人たちは、非常に奥ゆかしい方々が多くて、誰もしゃべらないので舞台を作って、町の人たちの前に引っ張り出して、「東京の森のこと、林業のこと」をしゃべらせようという企画をしました。それもこのような講演会という形ではなくて、山の方に町の間人を連れてきて、しゃべらせて。しゃべるだけでなく、1泊2日でその山の経営者の人達の今までの苦労の話とかも、ちゃんと聞いて一緒にお酒を飲んで交流し、次の日は現実に山を見てもらおう。というような企画でした。

有名でも何でもない、ただの林業をやっている山のおじさんを連れてきて、話を聞くだけですから、「そりゃ仲間内のおかしな奴しか集まらないんじゃないか」の予想を覆し、宿泊場所を確保するのも大変なくらい、1回に70人位の人たちが集まりました。それも、檜原村だけではなく、2年くらいかけてその時あった東京の山村部の全部を回り、合計8回ほど開催しました。

- (5) 「語る会」も何回もやってますと、だんだん常連さんも出てくるし山の林業経験者の方も自分の知り合いの林業関係者や出入りの製材屋さんを連れてきてくれるようになりました。町の人達の中には、「そろそろ家を建てようかな。」と思っていた人もいますし、建築設計の人達にもそういう事に興味のある人も来ていて、毎回毎回、酒を飲んでる中から余談話となり、「結局なんだかんだ言っても、木が使われなければ山は良くなるんじゃないか」との結論が出てくるわけです。

「どうやったら東京の木材が使われるようになるんだろう」、誰もやってくれないんだったら、俺達が作ろうということで「東京の木で家を造る会」を立ち上げ産直の住宅を造ることとしました。今は、事業協同組合になって年間に12戸から13戸の家が建っています。それまでも産直住宅は一杯あったんですが、それは必ずと言って良いくらい山側のサイドが造っていましたし、考え方としては製材屋さんを中抜きして、「安い家を提供します」でした。

普通こういうものは、なかなかうまくは行かないんですが、全く利害関係のない人間がコーディネートして一銭も儲からないのに、「この山を良くするためには、みんな協力していかなきゃ」ということで、まとまっています。

この「東京の木で家を造る会」が発端になって、全国で近くの木で家を造る運動というものが出来上がり、この運動の初代の代表は「東京の木で家を造る会」の代表が務めました。初めは、20~30人の変わり者が、ただただ山仕事をしているだけだったのが、それがいつしか、より多くの人に森のことを知らせよう、とか、やっぱり森のために木材を使うべきだとなり、全国的に「木で家を造る運動」まで行くということは、市民のもつ、その力というものを如実に見せつけられたような気がしました。

これは、森林ボランティアに限らず市民の参加というものは、色んな事を進めるための一つの大きなキッカケになるんだということだと思えます。

- (6) もう一つは、「森づくりフォーラム」は森林ボランティアをやっているグループの

基本的な集まりなんです、下草刈りを体験したいという人たちが100人以上も集まると大騒ぎになり、落石があったり危なくてしょうがないわけです。

そうした時に、これだけ多くの人達を巻き込んで森林ボランティアの活動が広がってきているのに、「保険とかそういった問題が残っている。」保険制度を自分達で研究しようとなって、保険会社と相談して「森林ボランティア保険」という保険制度を自分達で作り、元請けになるまでに発展してきました。

## 6 まとめ（参加から共同へ）

市民活動は、今、話しましたように、ただ単に山仕事をしてくれるという範囲を越えて、流通の話から政策の問題にまでどんどん関わりはじめています。国や林業関係者は、市民を共同のパートナーとして捉え、それだけのことをやれる可能性のある人達にきちんと対応しないのは、どう考えても損だと思われ、森や林業を良くしていくためのパートナーとして、きちんと育てていくんだという思いで市民の参加とつきあう、今、そういう分岐点に来ているように思います。

最初の話に戻りますが、「公共性」、「森林を管理する」ということは、「お上」だけがやることでもなく、また「民間」だけでやることでもないし、みんなで「お金をどう出すか」、「力をどう出し合うか」、「どんな新しい知恵があるのか」を一緒に考えながら、最終的には税金も出してもらわないとダメだとしても、納得してお金を出してくれる人が多くなる必要があるかと思っています。

最近、「参加から共同へ」というのが、色々な分野でのキーワードになっており、森林保全においても同様の流れとなって来ています。私達フォレスターの視点を、これまでの「上から」ではなく、「横に並んで一緒に！この人達と新しい物を作り上げていくんだ！」という形に変えていくことが、今まさに、求められているんじゃないかと思っています。

〔(注) この講演内容は、青森分局指導普及課において収録し、抜粋したものです。〕